

.....  
 書 評  
 .....

水垣涉著『宗教的探求の問題 —— 古代キリスト教思想序説 ——』

創文社, 1984年6月, pp. x+383.

野 町 啓

本書は、序論及び4部10章からなっており、各部各章は、それぞれ以下に示すようなタイトルを有している。すなわち、第一部 基礎的概念の成立 第一章 初期キリスト教における「マタイによる福音書」7・7の解釈、第二章 アレクサンドリアのフィロンの「探求と発見」論、第二部 ユスティノスと探求の問題 第三章 「求道」の問題、第四章 探求とロゴス、第五章 「期待」の思想、第三部 古代キリスト教とその周辺における探求の諸相 第六章 探求と好奇心—フィロン・「使徒行伝」・アブレイウスを中心に—、第七章 探求としての「キリスト教理解」—オリゲネス『ケルソス駁論』3・12—、第八章 探求と形成—バンレイオスの場合—、第四部 神と探求 第九章 アレクサンドリアのフィロンにおける能動と受動の問題—《τὸ ἀνεπιπενοῦθός》の概念を中心に—、第十章 「はたらきをはたらく神」(Deus operans operari)—「ピリピ人への手紙」2・13の解釈序説—、である。これら各章はさらに細分され、本書は全70節から構成される大作である。しかも、本書は単に量的に浩瀚であるばかりでなく、対象とされている時代も副題に示された「古代キリスト教」の域を越え、各節で取り上げられている問題に応じてアウグスティヌス、トマス、エックハルト、ルター、カルヴァン等の思想が検討されてい

る。さらに、巻末に付された著者名の索引には300人余の19世紀以降の研究者があげられているが、本文や歴大な註においてそのいちいちの所説が祖上にのぼられ、それに相応じて、宗教的探求という一貫した主題の下に、各章各節で取り上げられている諸問題の余すところのない検討が試みられているのであって、本書は、近年のキリスト教思想研究の面でも、類をみない質感を有するものとなっている。

著書は、「はしがき」において、本書が「宗教的探求の概念を手掛りとして、古代キリスト教思想の森のなかを探った結果の報告である」と述べ、序論を始めるに先立ち、アウグスティヌスの“*Intentum me fecit Evangelium sanctum.*” (*Sermo*, 93, 5) を掲げている。周知のように、『告白』第Ⅻ巻において、「創世記」冒頭の解釈にとりかかるにあたり、「詩篇」(28・9)を典拠に、聖書を「森」に、それに分け入り探求しようとする者を鹿になぞらえたのは、アウグスティヌスであった。またそこにおいて(17章22節)、独自の時間論を展開する過程で、“*Quaero, pater, non adfirmo.*” といい、探求ということを重視しつつ、直ちにこれに続けて“*deus meus, praeside mihi et rege me.*” と「詩篇」(22・1 ; 27・9)を引用しているのも、同じくアウグスティヌスである。そして、本書全巻の意図と構成とは、アウグスティヌス、ことに『告白』第Ⅻ巻17章22節ときわめて符合するように、筆者には思われてならない。本書はすぐれて神学の書であり、神学に関してはまったくの門外漢としていうならば、本書の意義と特質の一つは、綿密な研究と共に、「メタ・神学」、むしろ「メタ・キリスト教思想史」とでもいうべきところに求められうるように考えられるのであって、そこに著者が、本書の副題を「古代キリスト教思想序説」とし、「キリスト教思想史」という用語をあえて用いなかった理由があるように思われる。換言すれば、著者が本書において「宗教的探求」という主題の下にまさに探求を試みたのは、古代キリスト教思想の成立根拠そのものであり、著者自身の表現を用いるならば、「キリスト教的自己意識としてのキリスト教理解」の成立過程の解明であったとあってよい。この点は、序論、ならびに本書の白眉とでもいうべき第七章のオリゲネス研究から端的に窺知されうる。こうした問題意識を、著者は、恩師にあたる故有賀鐵太郎教授の『オリゲネス研究』、『キリスト教思想における存在論の問題』から触発され、それを継承しさらに一層発展させたところに本書の結実をみたといえるように考えられる。「宗教的探求」とは、この視点か

ら古代キリスト教を検討するにあたって著者が提起したパラダイムであり仮説であって、本書の第一部から第三部までは、その有効性を古代キリスト教思想という「森」の中で探求し検討するのにあてられ、さらに第四部は、キリスト教成立の場（それを、著者は次にふれるように「宗教的フロント」と呼ぶ）にはたらき、その根底にあるキリスト教的神観の特質の探求にあてられているように、筆者には思われるのである。

「宗教的探求」ならびに「宗教的フロント」は、本書を貫くキー・ワードだと考えられるが、その核心にある著者の宗教上あるいは信仰上の問題意識は筆者の関心と能力を越える。だが、この両概念が本書の核心をなすものである以上、ここで理解の及ぶ限りにおいてふれておく必要がある。著者によれば、古代キリスト教とは、単なる神学現象でも歴史現象でもなく、「複合現象」（「混合形態」）であって、ユダヤ教、グノーシス主義、ギリシア思想との複雑な相互関係の場、つまり「宗教的フロント」において形成されていった。この「宗教的フロント」は、また「キリスト教的人格の形成の場」でもあるが、これを解明することは、教義を成立せしめる非教義的なはたらきを明らかにすることでもあり、したがって、この場に肉薄するには、従来なされてきたような教会史、教義史、敬虔史の枠組をもってしては不可能だ、と著者は主張する。この点は、本書の最終章において（p. 367, 註(1)）、著者が、教会や神学において伝承され、ある程度固定化、伝統化している「聖書解釈の枠組」それ自体の解明という野心的意図を披瀝していることとも符合するのであって、筆者が、本書を「メタ・キリスト教思想史」と特色づけてみた所以もここにある。そして著者は、古代キリスト教思想の宗教的フロントを解明するに有効ないわばパラダイムとして、故有賀教授の「緊張」を批判的に継承し発展させ、それに代るものとして「探求」を提起しているのである。つまり、著者は、「探求」こそ、古代的概念であると共に、故有賀教授の「緊張」に欠ける憾みのある、思想を生み出すはたらきをも実現しうるものとみなし（ことに第三部第七章）、古代キリスト教思想が「発見と探求」との関連における途上のなものとして現実化されていく過程、つまり古代キリスト教という「森」を、パラダイム自体の有効性・妥当性の検証とあわせて、第一部において解明しようと試みているといえる。そしてこの作業は、学説史的検討はいうまでもなく、本書の事項索引に文法上の術語が多く見い

出されることから示されるように、フィロン、聖書、ユスティノス、オリゲネス等それぞれのテキストの綿密な内在的分析によって遂行されているのである。著者は、古代キリスト教思想を不断かつ多様な動態としてとらえ、ひいてはこの「宗教的探求」の動詞的性格を強調している。先にふれた事項索引においても、動詞にかかわる用語が多くみられるが、著者は、単に宗教的フロント解明の鍵としての探求にとどまらず、キリスト教自体の特質そのものを、その神観のいわば動詞的性格に求めているのであって、それが見事に剔抉されているのが、本書の掉尾を飾る第十章であろう。

第十章は、とかく近代の註釈家たちによりその神学的意義が等閑視されている「ピリピ書」(2・13, *θεὸς γὰρ ἐστὶν ὁ ἐνεργῶν ἐν ὑμῖν καὶ τὸ θέλει καὶ τὸ ἐνεργεῖν ὑπὲρ τῆς εὐδοκίας.*) に着目し、そこにおいて *ἐνεργεῖν* が神と人間について用いられていることの意味を解しつつ(ちなみに同箇所は、新約中、*ἐνεργεῖν* が人間について使われている唯一の例だという)、この一節が、パウロ、ひいてはヘブライ・キリスト教的神観の核心をなすものであることを析出した野心的な研究である。本章にみられる著者の視点は、本書全体を貫くものであり、それはまた、本章第七節にみられる R. Otto (*West-östliche Mystik*) の同節解釈に対する著者の評価に示されているように、故有賀教授から著者が継承し、一層の発展を期したハヤトロギアとオントロギアの問題意識からするものといえよう。そして本章の意義は、第二章・第九章双方との関連で考える必要がある。第二章・第九章は、直接にはフィロンを対象とするものであるが、とりわけ第二章の主題について、著者も自負するように(p. 65, 註5)、従来フィロンの「探求」論を重視した研究はあっても、それを「発見」と関連づけ、本書にみられるように「探求と発見」論として展開したのは、本書が最初であろう。しかも著者は、単にフィロンの「探求と発見」論を問題とし、フィロンの観点を「探求と発見」として特色づけているにとどまらず、そこから創造者としての神の絶対的能動性、ならびに神と人間とを彼が「能動—受動—能動的受動」の関係を軸に理解していることを明らかにし、その成果の下に「ピリピ書」(2・13)の意義をみようとしているのである。本書においては、フィロン研究が全体のかなりの部分を占め、古代キリスト教思想成立の契機として彼が重視されているように考えられる。著者は、本書において、ヘブライ・キリスト教思

想、ヘブライ的ないしキリスト教的思想(信)という両表現を用いているように思われるが、フィロンの古代キリスト教思想に対する影響なり、連続性の問題は、ギリシア教父にとどまらず、今後、著者の成果をふまえ、西方ラテン教父についてもなされる必要があろう。ともあれ、「探求」というパラダイムにより著者が析出した古代キリスト教思想の動詞的性格、神の絶対的能動性(これはユスティノスについても、異なった観点からではあるが注目すべき指摘がなされている、cf. p. 203, 註(2))は、筆者もかつて本書第十章の論文の初出を読み触発されたことがあるが(『中世思想研究』XXV, 拙稿「ギリシアの混合論とクリストロジー」p. 56, 註(54)), 今後大いに留意すべき点であろう。なお本書には、《Vetus Latina》の自在の活用がみられる。これは、教父研究をなす場合、当然のこととはいえ、わが国のこの方面の研究でこうした手順がふまれている例を筆者は寡聞にして知らない。著者のこの態度は、同学の一人として学ぶところが多大である。

Gerard Verbeke: *The Presence of Stoicism  
in Medieval Thought.*

The Catholic University of America Press,  
Washington, D. C. 1983,  
pp. viii+101.

金井多津子

本書は、中世におけるストア思想の受容とその存続を、中世全体を見通す広い視野をもって論じたものである。その出発点となっているのは、著者が本書冒頭でふれているように、M. Spanneut の *Permanence du Stoïcisme de Zénon à Malraux* (1973) にみられるような、ストア思想は中世においてほとんど顧られなかったとする立場に対する批判である。そして著者は、ストア思想と中世の思想家たちとのかわりを端的に表すものとして、マテリアリズム、自然法、synderesis、自由、